

縄文雪まつり

入場無料です!



- 日時: 2月5日(月)~10日(土) 9:00~17:00
[5日は13:00から、10日は16:00まで]
- 場所: 赤れんが庁舎 2階 2号会議室(札幌市中央区北3西6)
- 共催: 北の縄文道民会議、北海道縄文のまち連絡会
- 協力: 札幌国際大学縄文世界遺産研究室
- 内容: 縄文土器などの出土品展示、パネル展、北の縄文セミナー など
※2月10日開催の「北の縄文セミナー」は
事前予約制となっています。詳しくはチラシ等をご覧ください。



▲ 昨年の開催風景

■主催・問合せ: 北海道縄文世界遺産推進室 011-204-5168

会員メッセージ

「縄文～文明と文化のはざま～」

北の縄文道民会議会員 深川市職員 石田 恵

私は、学生の頃から歴史—その頃は漠然と飛鳥ぐらいまで—を主な関心としていた。そのうち自分がいる北海道の歴史に集中するようになり、古代から北海道に住む人たちは、東日本の各地とネットワークを作り、交流しながら独自の文化をつくってきたことにひかれた。各地の遺跡・遺物の研究が進むと、世界的にも稀な「農耕牧畜を伴わず、1万年間という長きにわたって狩猟・漁労・採集を主たる生業とした定住生活」が明らかになり、豊かな精神性を通底しながら、地域で独自の文化が開花し、「停滞の時代」ではなく、拡大再生産をせず、必要な分だけ調達(当然冬期の貯蔵分を含めて)して、とり尽くさず、若干の農耕(粟の植栽)を行うことで、自然・環境と分かち合い、持続可能な社会をつくりあげていた。

貝塚や盛土遺構にみられる「送り(おくり)」の痕跡は、自然から身の回りの生活用品まで「そこに「魂」がある」とすることのあらわれである。そして大型の遺構は、何らかの社会を形成し、そこには一定程度集落のリーダーがいることを表し、集落の心をつくるために作られたのだろう。

そして「縄文」の「縄目」の紋様に由来し、縄目は民俗学的には「蛇」=「生命の再生復活」と考えられることが多く、乳幼児の死亡率が非常に高いこの時代、死産や亡くなった子の生まれ変わりを願わずにはいられなかったことがうかがえる。

きっと物づくりの専門家がいるに違いないと思わせる精緻なつくりは、加工用道具など無い時にどれほどの時間、そしてどれほど思いをこめて制作されたのか「ものづくり」=「心を閉じ込めたもの」をつくることを表しているのかもしれない。それは現代の私たちからは及びもつかない、純粋に生命そして自然への思いが込められている。

世界遺産はスタートでしかない。地元や周辺の遺構・遺物を地域で共有・大事にして次世代に引き継いでいきたい。
(深川市にも国史跡「音江環状列石」があるので、冬が終わり、春がきたらぜひ。)



《お詫び》「北の縄文」VOL.5、3P「縄文文化の終焉と北海道のあゆみ」(寄稿 松田宏介 氏)の、右側28行目の後に「し、これを縄文と呼びに至ったのです。」の一文が印字されておりませんでした。訂正の上、お詫びいたします。

編集後記

- ◎ 会員の皆様、明けましておめでとうございます。「申酉(さるとり)騒ぎ、戌(いぬ)笑う」は株の格言ですが、今年こそ「北の縄文」が「大願成就」を果たすことを願っています。「北の縄文遺跡で奇跡だ!!」(T.H)
- ◎ 明けましておめでとうございます。今年もご愛読いただける会報づくりを目指して精進します。よろしくお願いします。(M.S)
- ◎ 本年も会報「北の縄文」をよろしくお願いいたします。2月開催「さっぽろ雪まつり」の市民雪像エリアに、今年も「雪偶」が登場すること。『縄文雪まつり』とともに要チェック!!(I.K)



編集・発行: 北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議 編集長 谷 紘道 編集委員 村上志保子、井上香織
TEL: 011-221-1122 FAX: 011-221-0117 <http://www.jomon-do.org/> E-mail ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp

HOKKAIDO JOMON CLUB NEWSLETTER 北の縄文 冬 2018 Vol.6

平成30年1月発行



目次

- 北の縄文コラム 1
- 縄文雪まつり 北の縄文セミナーin 赤れんが 2~3
- 縄文イベント情報/会員メッセージ 4

北の縄文コラム

「畑 宏明さんの思い出と世界遺産」



今、北海道と北東北三県は、世界文化遺産を目指して懸命に取り組んでいますが、そのきっかけは、当時の堀知事が三県との知事会議で提案されて実現した「北の縄文文化回廊づくり」の取組です。私は道職員としてその事務を担当しましたが、私自身かねてから関心の強かった縄文文化に関わる施策に携われたことを今も有り難いと思っています。

ただ、今よりも縄文文化の周知度は低く、いかにアピールするかが課題でしたが、その時にたいへんお世話になったのが道教委におられた畑宏明さんでした。あまり予算もない年度途中での突然のお願いにも関わらず、「縄文に光が当たることはうれしい」と積極的に協力してくださり、赤れんが庁舎での縄文展が実現しました。

その後も畑さんには、縄文文化の発信と一緒に取り組んで頂き、多くの方々に考古学の成果を分かりやすい言葉と笑顔で語りかけてくださいました。しかし本当に残念ですが、3年ほど前に他界されました。亡くなる直前まで病と闘いながら、縄文の「語り手」として力を尽くされる姿には本当に頭が下がりました。

畑さんのお力が最も発揮されたのが森町の鷺ノ木ストーンサークルの保全でした。道建設部の並々ならぬ努力とそれを動かした畑さんの執念が、NEXCO 東日本の英断につながりました。

畑さんは、「世界遺産になれば縄文文化が世界のスタンダードになる」と熱く語られていました。世界遺産登録が実現すればもっとも喜ばれるお一人であった畑さんに、感謝の気持ちを込めて朗報をお届けできる日がくることを心から願っています。



学校法人札幌大学 理事長 荒川 裕生

縄文雪まつり 北の縄文セミナーin 赤れんが

平成29年2月11日、北海道庁赤れんが庁舎において開催した『縄文雪まつり』の「北の縄文セミナーin 赤れんが」では、2名の講師にご講演いただきました。その一部を抜粋してご紹介します。

「縄文雪まつり」は、本年も2月5日～10日に開催します。ぜひ、ご来場ください。（詳細はチラシ等をご参照ください）

弓と櫛と環状列石

— 今に残る「縄紋」 —

前 秋田県埋蔵文化財センター長 小林 克 氏

1 弓

弓矢は、縄紋時代に初めて登場する狩猟の道具であり、北東北や道南では4千年前頃の「狩猟文」土器に描かれる。それらには弓矢、小さな動物、樹木と枠のようなものが表現され、また、右手だけをラケットのように丸く描いた人体文だけの土器もある。

左右で異なる手は人体の正面と背面を描き分けたから、という説があり、私も同様に解釈している。17世紀のオランダの旅行家、ニコラス・ヴィトゼンは、右手に丸い撥を左手に片面太鼓を持つ、ツングースのシャマンを描いている。「狩猟文」土器の枠を太鼓と見れば人体は、まさにこのシャマンを表すと言える。

江戸時代の紀行家・菅江真澄は、秋田県大館地方を旅し、墓に弓矢を立て掛ける弔いの様子を、霊魂を黄泉の国まで導く風習で、非常に古くから続くのではと記している。大陸ではアムール川流域やバイカル湖周辺の葬礼で矢を放つ儀式がある。北海道ではアイヌの儀式的「イヨマンテ」が有名。そして「狩猟文」土器の分布と墓に弓を掛ける葬俗の分布を地図に落とすと、非常に近い。

おそらく「狩猟文」土器は狩猟場面ではなく、北の大陸文化の太鼓を叩くシャマンと送魂の弓矢の表現で、北東北の墓地での弓掛け儀礼につながる。葬礼で矢を放つ、墓に弓を掛けるなどの儀礼は、遠い過去に大陸から列島まで伸びた北方文化ではないだろうか。

2 櫛

恵庭市カリンバ遺跡には、頭部の反対側に1個の櫛が出た墓があり、足下に添えた可能性がある。シルクロードにも、櫛が足下から出た遺跡がある。また、秋田県の戸平川遺跡では墓地近くの谷で、埼玉県後谷遺跡や石川県米泉遺跡では溝や低地で多くの櫛が出た。

記紀に黄泉の国訪問神話があるが、イザナギが逃げる際、投げた物の中に櫛がある。

グリム童話でも幼い兄妹が、泉の魔女に櫛を投げて逃げる。これらは「呪的逃走譚」と言われ、世界的に広がる。大林太良氏がまとめた分布図から櫛が要素のものを拾うと、北アメリカ、ヨーロッパ、中央アジアに広がる。また、インドには実際の儀礼を伴う葬俗がある。

櫛は、本州では谷や溝から、北海道では墓の足下から出る。いずれも「呪的逃走譚」の「投げ櫛」に通じる。似た葬俗は山梨・岡山・鳥取・徳島の現代の民俗誌に記録されている。

3 環状列石

道南から北東北の環状列石は、2500年前から4000年前までの縄紋時代後期から晩期に、1500年の時をはさんで存在した。そのため現代にも通じるのではと考え、調べ始めた。

大館市の仲仕田という集落に、直径30メートル位で碑銘が中央を向く環状配置の墓地がある。同市の中山にも同様の20メートル位の小さい墓地がある。これらがある大館地方は、大湯環状列石や高屋遺跡がある鹿角市と、伊勢堂岱遺跡のある北秋田市にはさまれた地域。この地域には中央に広場をもって環状に墓地を作ることが残る。秋田県他の地域にはないが、弘前市周辺には多少ある。非常に不思議なことで、まだ解明するべきものがあると考えている。

4 まとめ

北東北から道南に環状列石が登場する前後、今から4200年前以降は、大陸北方を経由する文化が列島に大きく影響したのではないかと。その文化の片鱗は、現在の民俗や大陸の民族誌の中にも見いだすことができる。そして北東北から道南の文化的伝統の中、前世紀末から今世紀はじめにかけて、両地域は縄紋時代の環状列石を保存したのである。



▲ 小林氏講演風景

北の土偶が語る縄文世界

(公財) 北海道埋蔵文化財センター

常務理事 長沼 孝 氏

土偶は、全国の遺跡で約2万点が発見されていますが、北海道では120カ所ほどの遺跡から約450点が出土しているだけです。道央から道南の遺跡が多いですが、道東の十勝、斜里、根室などでも発見されています。

道内の土偶で最も古いのは、函館市中野A遺跡の早期のもので、それに次ぐのは帯広市大正3・芽室町小林遺跡の前期のものです。前期後半の時期では、石で作る岩偶が多く、青森県などと同様の岩偶が道内にもあり、福島町館崎遺跡では40cmを超える日本で最大の岩偶が出土しています。中期の土偶は小さいものが多く、顔の表現があるものは少ないですが、頭・手・足が表現されており、十字形土偶と呼ばれています。

後期の中頃には頭が山形になった山形土偶と呼ばれるものが、東日本、特に関東に多く、北海道でもみられます。後期も後半になると、道内では目と口が短い線で表現された顔や手の形に特徴がある土偶がみられます。根室市初田牛20遺跡の土偶は、縄文文化が根室まで広がっていたことを示しています。晩期では北東北の遮光器土偶に似た、肩が張って、手足が短いものが道南でみられます。一方、道央では土製仮面や仮面を着けているものなど、東北とは異なる特徴の土偶が出土しています。北海道唯一の国宝である中空土偶「カックウ」は、後期後半の土偶ですが、顔が同様に作られた土偶が、東日本一帯からみつかり、「広域土偶」とでも呼べるものです。

このように土偶は、地域と時代によって異なった特徴がみられますが、一方、一つの遺跡、地域、場合によっては広い地域の中で共通したイメージが存在したことも事実です。おそらく、それらは土器とは異なった世界観であったと考えられます。

北海道の土偶は、完全な形、または完全な形に近い状態まで接合できるものが多く、また、墓から出土するものが多いのも大きな特徴。お墓の上で土偶を叩いて壊している札幌市N30遺跡の事例があります。生と死を考えたとき、この世とあの世は逆

で、死はこの世では生の終わりですが、逆にあの世での蘇りにつながります。したがって、形あるものを壊すことで、この世では使用できないが、逆にあの世では使うことができる、という考え方になります。人を埋葬するにあたり、わざわざ完全な形の土偶を壊すことは、あの世でのお供ができるといった考えのようです。

では、土偶は誰が作ったのか。土偶の数は間違いなく土器ほど多くありません。それは、誰でも作れたのではなく、例えば霊力が強い人など、作る人に意味があったのではないかと。そして、その人が亡くなるとその土偶も効力が失せ、あの世で蘇るよう、お墓に入れたり、土器と一緒に捨てたのではないのでしょうか。

また、土偶は、単純に人形を模したものではなく、縄文文化研究の第一人者である小林達雄先生は、土偶とは縄文人がイメージした精霊を形にしたものだ、と述べています。

縄文人は、自然と付き合いながら生きていく中で、病気など、自らの力が及ばないことに対して、何かに祈ったり頼ったりせざるを得なかった。そのよりどころが土偶だったのではないのでしょうか。

ここ数年、土偶を現代的な感覚で取り上げた本やフリーペーパーが出ています。また、最近の研究では、縄文人の遺伝子が、我々にも12%程度あると言われています。縄文文化や土偶を古いものとしてみるのではなく、現代の我々にも理解や共感できる要素があるものと思ってみるとおもしろい。

最後に、縄文文化と同じものは世界にはありません。足踏みをすることはあっても、世界遺産に登録される可能性は十分にあります。ここ数年、登録に向けた取組で講演会や展示会が開催され、皆さんに縄文文化を知っていただく機会が増えていることは、喜ばしいことだと思っています。

登録は終わりではなく、スタート。これからも応援していただきたい、と思います。



▲ 長沼氏講演風景

